

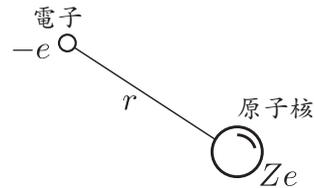
科目名	学年	番号	学籍番号	氏名
量子力学I 第9回	2			

全問解答し、答え合わせ（自己採点）をして提出せよ。

授業時間外の学習時間： _____ 時間 _____ 分

- [1] 「詳解 量子化学の基礎」の9章の9.1節～9.4節（95頁～101頁）を読みなさい。
- [2] 原子核に Ze ($Z = 1, 2, 3, \dots$) の正電荷を持ち、電子が1個だけの原子を と総称する。 Z と e はそれぞれ、正電荷（陽子）の数と を表す。陽子の数は に等しいから、 $Z =$

1 であれば水素原子を表し、 $Z = 2, 3$ ではそれぞれ He^+ と Li^{2+} を表す。



- [3] 原子中の電子は、核からの Coulomb 引力を感じながら運動する。核を原点におけば、電子は原点からの距離にだけ依存するポテンシャル $U(r)$ を感じながら運動することになる。このように、電子に働く力が原点からの距離だけに依存する場を といい、これを取り扱うには極座標が便利である。そこで、極座標系で Schrödinger 方程式を書き下すと、次のようになる（直交座標からの書き換えは省略）。

$$-\frac{\hbar^2}{2m_e} \frac{1}{r^2 \sin \theta} \left[\sin \theta \frac{\partial}{\partial r} \left(r^2 \frac{\partial \Psi}{\partial r} \right) + \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \frac{\partial \Psi}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial^2 \Psi}{\partial \phi^2} \right] + U(r) \Psi = E \Psi \quad (1)$$

とりあえず、ポテンシャルエネルギー項はあらわな形では示さず、 $U(r)$ という具合に核からの距離のみに依存する、すなわち r だけが変数として入っていることだけを示すにとどめ、議論を進めよう。

- [4] 波動関数 Ψ が r だけを変数とする関数 $R(r)$ 、 θ だけを変数とする関数 $\Theta(\theta)$ 、 ϕ だけを変数とする関数 $\Phi(\phi)$ の積で表される、すなわち、 できると仮定する。

$$\Psi = \text{ } \quad (2)$$

(2) 式を (1) 式に代入し、整理すると次式を得る。導出は問題 [8] とした。

$$\underbrace{\left[\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) \right]}_{[\theta, r]} + \underbrace{\left[\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) \right]}_{[\theta]} + \underbrace{\left[\frac{2m_e r^2 \sin^2 \theta}{\hbar^2} \{E - U(r)\} \right]}_{[r, \theta]} = - \underbrace{\left[\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} \right]}_{[\phi]} \quad (3)$$

(もう何度も説明して来たが、) 右辺に注目すると、 ϕ だけを変数として含む関数 $\Phi(\phi)$ を ϕ で2回微分して、その結果を自分自身 $-\Phi$ で除しているが、 ϕ だけを変数として含む関数 $\Phi(\phi)$ に対し、いかなる操作をしようとも、その結果が変数 θ や r を含むわけがない。左辺は右辺に比べてずっと複雑だが、 θ だけを変数として含む関数 $\Theta(\theta)$ や r だけを変数として含む関数 $R(r)$ にいかなる操作をしようともその結果が変数 ϕ を含むわけがない。これらが等号で結ばれるような状況が成り立つのは、左辺も右辺も定数である場合だけである。しかも、右辺 = 定数とおいた微分方程式はすでに解いたことのある形をしている。では、ここから片づけよう。

[5] 定数を m^2 とおく。

$$-\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = m^2$$

これを解くと $\Phi(\phi) = \boxed{\text{(g)}}$ ただし $m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots$ (4)

ここで、 $-\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = m^2$ を (3) 式に代入して Schrödinger 方程式を再度整理し直す。

$$\left[\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) \right] + \left[\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) \right] + [-m^2] + \left[\frac{2m_e r^2 \sin^2 \theta}{\hbar^2} \{E - U(r)\} \right] = 0$$

$-\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = m^2$ を代入した

$$\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) - m^2 = -\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) - \frac{2m_e r^2 \sin^2 \theta}{\hbar^2} \{E - U(r)\} \quad \text{整理した}$$

$$\underbrace{\boxed{\text{(h)}}}_{[\theta]} = \underbrace{-\frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) - \frac{2m_e r^2}{\hbar^2} \{E - U(r)\}}_{[r]} \quad \sin^2 \theta \text{ で両辺を割った} \quad (5)$$

左辺が θ だけ、右辺が r だけを含む形になった。繰り返しになるが、これがあらゆる θ と r に対して成り立つためには左辺、右辺が定数でなくてはならない。ここでは左辺から片づけよう。

[6] 定数を $-\ell(\ell + 1)$ とおくと、(5) 式の左辺は次のように表される。

$$\boxed{\text{(h) 再出}} = -\ell(\ell + 1) \quad (6)$$

$\boxed{\text{(i)}}$ の陪多項式がこの微分方程式の解である。

$$\Theta_{\ell, m}(\theta) = \sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell - |m|)!}{(\ell + |m|)!}} \sin^{|m|} \theta \frac{d^{|m|}}{(d \cos \theta)^{|m|}} P_{\ell}(\cos \theta) \quad (7)$$

$$\text{ただし } P_{\ell}(\cos \theta) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{(d \cos \theta)^{\ell}} (\cos^2 \theta - 1)^{\ell} \quad (8)$$

$$m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots, \pm \ell \quad (9)$$

[7] $\Theta(\theta)$ を求めるときに、左辺 $= -\ell(\ell + 1)$ とおいたので、右辺も $-\ell(\ell + 1)$ に等しいとおく。

$$-\frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) - \frac{2m_e r^2}{\hbar^2} \{E - U(r)\} = -\ell(\ell + 1) \quad (10)$$

最後に残った $R(r)$ は、 $U(r)$ の具体的な形が与えられなければ得ることができない。水素類似原子において、電子は核からの電気的な引力でつなぎ止められているから、 $U(r)$ は $\boxed{\text{(j)}}$ ポテンシャルを考えればよい。

$$U(r) = \boxed{\text{(k)}} \quad (11)$$

ここで、 ϵ_0 は $\boxed{\text{(l)}}$ を表す。(11) 式を (10) 式に代入すると、次のようになる。

$$-\frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) - \frac{2m_e r^2}{\hbar^2} \left(E + \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{Ze^2}{r} \right) = -\ell(\ell + 1) \quad (12)$$

この微分方程式は,

$$E_n = -\frac{Z^2 m_e e^4}{8\epsilon_0^2 \hbar^2 n^2} \quad (13)$$

とおいたときにだけ有意な解を持つことが知られており, 解は次のように表される。

$$R_{n,\ell}(\rho) = -\sqrt{\frac{4(n-\ell-1)!}{n^4 [(n+\ell)!]^3}} \left(\frac{Z}{a_0}\right)^{3/2} \rho^\ell e^{-\frac{\rho}{2}} L_{n+\ell}^{2\ell+1}(\rho) \quad (14)$$

$$\text{ただし } \rho = \frac{2Z}{na_0} r, \quad a_0 = \frac{4\pi\epsilon_0 \hbar^2}{m_e e^2} \quad (15)$$

$$n = 1, 2, 3, \dots, \quad \ell = 0, 1, 2, \dots, n-1 \quad (16)$$

ここで, $L_{n+\ell}^{2\ell+1}(\rho)$ は (m) の陪多項式とよばれる特殊関数で, 次式で表される。

$$L_\alpha^\beta(\rho) = \frac{d^\beta}{d\rho^\beta} L_\alpha(\rho) \quad \text{ただし } L_\alpha(\rho) = e^\rho \frac{d^\alpha}{d\rho^\alpha} (\rho^\alpha e^{-\rho}) \quad (17)$$

[8] ここまでで, 水素類似原子の波動関数 Ψ とエネルギー E が次のように求まった。

$$\begin{aligned} \Psi_n = & \underbrace{-\sqrt{\frac{4(n-\ell-1)!}{n^4 [(n+\ell)!]^3}} \left(\frac{Z}{a_0}\right)^{3/2} \rho^\ell e^{-\frac{\rho}{2}} L_{n+\ell}^{2\ell+1}(\rho)}_{R_{n,\ell}(\rho)} \\ & \times \underbrace{\sqrt{\frac{2\ell+1}{2} \frac{(\ell-|m|)!}{(\ell+|m|)!}} \sin^{|m|} \theta \frac{d^{|m|}}{(d \cos \theta)^{|m|}} P_\ell(\cos \theta)}_{\Theta_{\ell,m}(\theta)} \cdot \underbrace{\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{im\phi}}_{\Phi_m(\phi)} \end{aligned} \quad (18)$$

$$E_n = -\frac{Z^2 m_e e^4}{8\epsilon_0^2 \hbar^2 n^2} \quad \text{もしくは} \quad E_n = -\frac{Z^2 e^2}{8\pi\epsilon_0 a_0 n^2} \quad (19)$$

$$\text{ただし } \begin{cases} n = 1, 2, 3, \dots \\ \ell = 0, 1, 2, \dots, n-1 \\ m = -\ell, -\ell+1, \dots, \ell-1, \ell \end{cases} \quad (20)$$

ここで a_0 は,

$$a_0 = \frac{\epsilon_0 \hbar^2}{\pi m_e e^2} \quad (21)$$

で定義され, (n) とよばれる。数値的には $a_0 = 0.0529 \text{ nm}$ である。ここまでは (o) \hbar を用いてきたが, ここでは h を用いた。

[9] $\Psi = R(r) \cdot \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)$ を (1) 式に代入し, 整理すると (3) 式を得ることを示せ。

[10] 次に示した関数に $n = 2, \ell = 1$ を代入し, $R_{1,2}(r)$ の具体的な表式を得なさい。

$$R_{n,\ell}(\rho) = -\sqrt{\frac{4(n-\ell-1)!}{n^4[(n+\ell)!]^3}} \left(\frac{Z}{a_0}\right)^{3/2} \rho^\ell e^{-\frac{\rho}{2}} L_{n+\ell}^{2\ell+1}(\rho)$$

$$\text{ただし } \rho = \frac{2Z}{na_0}r, \quad a_0 = \frac{4\pi\epsilon_0\hbar^2}{m_e e^2} \text{ であり, } n = 1, 2, 3, \dots, \quad \ell = 0, 1, 2, \dots, n-1$$

ここで, $L_{n+\ell}^{2\ell+1}(\rho)$ は (m) 再出 の陪多項式とよばれる特殊関数で, 次式で表される。

$$L_\alpha^\beta(\rho) = \frac{d^\beta}{d\rho^\beta} L_\alpha(\rho) \quad \text{ただし, } L_\alpha(\rho) = e^\rho \frac{d^\alpha}{d\rho^\alpha} (\rho^\alpha e^{-\rho})$$

解答

[1] なし

[2] (a) : 水素類似原子 (水素様原子) (b) : 電気素量 (単位電荷) (c) : 原子番号

[3] (d) : 中心力場

[4] (e) : 変数分離 (f) : $R(r) \cdot \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)$

[5] (g) : $\frac{1}{\sqrt{2\pi}}e^{im\phi}$ (h) : $\frac{1}{\Theta \sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) - \frac{m^2}{\sin^2 \theta}$

[6] (i) : Legendre (ルジャンドル)

[7] (j) : Coulomb (クーロン) (k) : $-\frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{Ze^2}{r}$ (l) : 真空の誘電率 (m) : Laguerre (ラゲール)

[8] (n) : Bohr (ボーア) 半径 (o) : 換算 Planck (プランク) 定数

[9] (1) 式に $\Psi = R \cdot \Theta \cdot \Phi$ を代入するところから始めよう。

$$-\frac{\hbar^2}{2m_e} \frac{1}{r^2 \sin \theta} \left[\sin \theta \frac{\partial}{\partial r} \left(r^2 \frac{\partial R\Theta\Phi}{\partial r} \right) + \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \frac{\partial R\Theta\Phi}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial^2 R\Theta\Phi}{\partial \phi^2} \right] + UR\Theta\Phi = ER\Theta\Phi$$

Ψ を $R\Theta\Phi$ と書き換えた

$$-\frac{\hbar^2}{2m_e} \frac{1}{r^2 \sin \theta} \left[\Theta\Phi \sin \theta \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) + R\Phi \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{R\Theta}{\sin \theta} \frac{d^2\Phi}{d\phi^2} \right] + (U - E) R\Theta\Phi = 0$$

微分に関係ない部分は前に出した

$$\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) + \frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{1}{\Phi} \frac{d^2\Phi}{d\phi^2} + \frac{2m_e r^2 \sin^2 \theta}{\hbar^2} (E - U) = 0 \quad (22)$$

両辺に $-\frac{2m_e r^2 \sin^2 \theta}{\hbar^2 R\Theta\Phi}$ をかけた

最後の式の左辺第 3 項を右辺に移項すれば (3) 式を得る。

[10] まずは、ルートのついた大きな係数を計算すると、

$$-\sqrt{\frac{4(2-1-1)!}{2^4[(2+1)!]^3}} = -\sqrt{\frac{4 \times 0!}{2^4[3!]^3}} = -\frac{1}{12\sqrt{6}}$$

を得る。Laguerre の陪多項式は、 $L_{2+1}^{2 \times 1 + 1}(\rho) = L_3^3(\rho)$ であるから、まずは $L_3(\rho)$ を計算する。これは、単調な微分をひたすら実行し、

$$\begin{aligned} L_3(\rho) &= e^\rho \frac{d^3}{d\rho^3} (\rho^3 e^{-\rho}) = e^\rho \frac{d^2}{d\rho^2} (3\rho^2 e^{-\rho} - \rho^3 e^{-\rho}) = e^\rho \frac{d}{d\rho} (6\rho e^{-\rho} - 3\rho^2 e^{-\rho} - 3\rho^2 e^{-\rho} + \rho^3 e^{-\rho}) \\ &= e^\rho (6e^{-\rho} - 6\rho e^{-\rho} - 6\rho e^{-\rho} + 3\rho^2 e^{-\rho} - 6\rho e^{-\rho} + 3\rho^2 e^{-\rho} + 3\rho^2 e^{-\rho} - \rho^3 e^{-\rho}) \\ &= 6 - 18\rho + 9\rho^2 - \rho^3 \end{aligned}$$

を得る。求めたい Laguerre の陪多項式は、 $L_3^3(\rho) = d^3 L_3 / d\rho^3$ すなわち、 L_3 を 3 回微分すれば得られる。3 回微分して残る項は (当たり前だが) ρ の 3 次以上の項だけだから、ただちに $L_3^3(\rho) = d^3 L_3 / d\rho^3 = -6$ とわかる。以上より、

$$\begin{aligned} R_{2,1}(\rho) &= -\frac{1}{12\sqrt{6}} \left(\frac{Z}{a_0} \right)^{3/2} \left(\frac{2Z}{2 \times a_0} r \right)^1 e^{-(2Zr/2 \times a_0)/2} \times (-6) \\ &= \frac{1}{2\sqrt{6}} \left(\frac{Z}{a_0} \right)^{5/2} r e^{-(Zr/2a_0)} \end{aligned}$$

今日の講義でわからないことがあれば、お伝えください。また、講義に対する要望があればお書きください。感想なども結構です。もちろん、成績等には一切関係ありません。

記述欄